

茂吉の頭

吉田史子 岩手

拾ふとは寂しき行為無防備な背中さらして柄の実ひろふ  
わが手よりそれたる球根おのづから凹みを見つけ定まりたりぬ  
思ひ出をひろふごとくに繰るページ古き家並みの写真集なり  
何が無し上山なる茂吉像思ひ出だせり夜のバス停に  
彫刻の茂吉の頭に雪つもるさま思ひつつ眠らんとする

お白洲

中津川 勒 坐 埼玉

人を殺す動物ランク一位は蚊、二位のニンゲン殺すな人を  
級友の死亡記事あり浮沈あれど我にはとほき政治に生きし  
四十年ぶりに孤りのクリスマス弱りて家族旅行へ行けず  
お白洲を逃げてしらじら白を切るカルロス・ゴーンの（実悪）の眉  
武蔵野の径の霜ふむ足音に動力学のつくる律あり

林檎の尻

朝比奈 美子 千葉

橋ふたつ越えてわが行くちさき家、垣に山茶花咲くははの家  
蜜かをる林檎の尻を拭くやうにははのゐさらひしらかみに拭く  
介護の苦などは詠はぬはうがよし空がどんどん低くなるから  
蛇口よりますますに落つる水をみて介護のよるのころを立たす  
老いははは施設に入りてわれの手にひとつしづけく鍵たくされぬ

問ひは残酷

小倉

敬\* 神奈川

「昔って、平成何年ごろですか？」若手の問いは残酷である  
あっさりとして送り出されぬ若手らが次の店へと賑わう中を  
手のひらに載せた五つの柚子の実を生け垣越しに受ける手のひら  
芯先の丸まり出した鉛筆を立てて寝かせて書く細き文字  
語り口静かな男が自らに巢食った癩を語りはじめる

真顔に戻す

片岡

絢 神奈川

さまざまに中途半端なわたくしがプラネタリアムの扉を開ける  
ある秋を星空観望会へ来るにんげん達はくろぐろとして  
灰白くオリオン大星雲はあり体丸ごと吞まれてゆきぬ  
プラネタリアム出て霧時雨 生物が地球以外にゐないわけない  
同僚とランチのあとは顔面を真顔に戻し自席に座る

置き石

草野

正 信\* 新潟

一本の倒木となる雪の夜ふとんの面に冷えはきており  
雪乞いの神事終えたるスキー場刃のように雨降り続く  
制服の少女らの声に囲まれて我は車内の置き石ならん  
本閉ずるように地球を終らせて神は去りたり闇のむこうへ  
牛乳の膜口唇にふれる朝性欲説のフロイト顕てり

センター試験

早川 晃 央\* 富山

いつまでを新宿駅の棚にある「SUUMO 値崩れしないマンション」  
草だんごせんべい駄菓子屋を抜けて帝釈天の神籤大吉  
初めての教え子が挑む令和初そして最後のセンター試験  
セレモニーホールの昇降機で誰も声あげず四階までを立つ  
祭壇の祖母は微笑む我が歌を褒めくれし時のように微笑む

寒昴

一 瀬 武 子 山 梨

在りし日に教へくれたる寒昴一番光るが夫にかあらん  
散瞳の両目しばたき怖る怖る眼科医を出づ寒暮の街へ  
足萎えのわれを急かして玄関のチャイムせつかち立て続けに鳴る  
転びたるわれにかけより声かけてくれしは意外男子高校生  
文字いたく乱れし賀状いただきて幾日もあらず友の訃報は

過去へ

小田部 雅 子 静 岡

教へ子の四十五歳十七人笑顔のなかの禿頭三人  
教へ子の十七人に会ひしより夜ごと夜ごとの学校の夢  
置いてきた過去が一気に追つてきて教員の夢に毎夜めざめぬ  
寒の床猫が出這入りするたびに過去へ過去へとずり落ちてゆく  
今朝の猫視線びつびつと飛ばし行くホシ、追ひかける刑事のやうに

大楠

米田郁夫 奈良

台風に大枝落としみ社の屋根を壊しし大楠かなし  
村人ら社殿を壊しし大楠の伐採決めて審判終はる  
長く長く鎮守の森を守り来し大楠伐られ空に穴開く  
五百年の楠の木屑を拾ひたり令和二年の元旦斎庭  
凍て星の降り来る夜は山里に犬の遠吠え猪来るけはひ

庭師

大西晶子 福岡

庭師きて垣根の榎を刈る音す冬日和の午後よき律もちて  
庭にすむ山鳩けふは電線のうへにとまりて庭師うかがふ  
領収書くれつつ礼を言ふ庭師地下足袋が似合ふいなせな初老  
向かひ家の不在のあるじを案じをり庭木の手入れしてゐし庭師  
のきしたのシンピジウムに蓄つく障りのおほく日々過ぎし間に

まつすぐにして

中村仁彦 福岡

水底<sup>みなぞこ</sup>で生節のごと動かない鯉の子供ら街川が澄む  
疼痛と激痛の間<sup>あひ</sup>わが首の痛みは増して寒波来てをり  
痛む手でやつと結んだ屠蘇飾りまつすぐにして来る年を待つ  
我よりも短命だった四本の切り株しろき庭があかるい  
わが庭の狭き夜空を忽々と過ぎたるひかりいづこ彷徨ふ